

第5回 第2次清瀬市教育総合計画マスタープラン検討委員会会議録(要旨)

日 時 平成 28 年 5 月 27 日(金) 午前 10 時～12 時

場 所 健康センター第1会議室

出席者 委員 16 名(中田委員長 村田副委員長 島澤委員 佐藤委員 福島委員
齊藤(し)委員 菊地委員 矢澤委員 和田委員 林委員 広瀬委員
西澤委員 中西委員 内野委員 小苺米委員 齊藤(隆)委員)
その他6名(教育部参事 生涯学習スポーツ課長 図書館長 郷土博物館長 統
括指導主事)

欠席者 1 名(市川委員)

会議次第

1 開会

2 議題

(1)第2次教育総合計画マスタープラン検討委員会基本構想中間報告(案)

3 事務連絡

4 閉会

会議(要旨)

1 開会

2 議題

(1)第2次教育総合計画マスタープラン検討委員会基本構想中間報告(案)

(事務局)

資料「第2次教育総合計画マスタープラン検討委員会基本構想中間報告(案)」説明

(委員長)

今日議論した後パブリックコメントがあり、7月 14 日にもう一度まとめたものをだす。そこで最終的にまとめ8月 29 日には教育長に答申する。資料最後のページの「マスタープランの体系(イメージ)」について一つ目は施策の6本の柱について。順序性も含めてどうか。もう一つは施策の方向性について。意見をいただきたい。

(委員)

6本の柱について、この順番でいいか。イメージとして上の方にあるものの方が優先。そこから考えていかなければいけない。

(委員)

学び伝える生涯学習だが、一般的に生涯学習というと定年後がイメージ。ここでいう生涯学習は生まれてからの生涯学習ということ。他の柱と同じようにサブタイトルをつけたらもっとわかりやすくなるのでは。

(委員長)

生涯学習は学校教育の延長にあるのではなく、生まれてから、生涯にわたって学び続ける。学校教育もその一環であるという捉え方をしたときに、この図だと、並行ではないのではないかという指摘。その通りで、一番最初に入れたということは一つの形式だと思うが、他の五つとは桁が違い、他の五つがこの中に入っているという図になる。右の施策の方向性を出していくにあたりこの図になってしまう。

(委員)

最初に事務局が生涯学習を冒頭に持ってきたと強調した。ここは清瀬市の教育計画の特徴として打ち出した方がよい。③には学びの循環ということを前面に出してこういう計画案であるということとを協調すればこの構成でよい。

(委員長)

学びの循環というキーワードは早くからこの委員会でも出ていた。何か並べ方ででも工夫することはできそうか？

(事務局)

委員長が言ったとおり、対応する施策の方向性を記入する以上、このような系列的な表記をせざるを得ない。委員の中で生涯学習を一押ししていくという考え方であるならば、生涯学習を目立つような形で表記し、他の物はこの中に含まれているという書き方をする。

(委員)

このイメージ図では、並列にしか見えない。根本的にイメージ図を変えないと生涯学習と他の柱が並列になってしまう。イメージ図の工夫が必要。

(委員)

生涯学習ということは、このマスタープランが何を対象としているかの範囲を決めることになるので明解にしておくべき。目立つように表記し、施策の方向性そのものが2番目以降の5本の柱を説明するようなものになるようにする。一番上は書き方の工夫が必要。そこだけ二重線で囲むだけではなく、方向性そのものの考え方を見直すよう工夫が必要。

(委員長)

ここに書かれている表現について、学び伝える生涯学習がいいか、学びの循環を満たす清瀬のまちとか、そういった範囲という大きな指摘があったが、このマスタープランが、生涯学習を視野に入れたプランであるということを示すという表現も考えられる。

(委員)

上下という関係ではなく、平面で循環していくというふうなまとめができれば、特徴ある教育計画が出来上がるのでは。こういった教育計画は他の自治体もやっていること。その中で清瀬らしい切り口ということを見ると、生涯学習ということを出して、循環していく。どこが最初でどこが最後

ということではなくて、学びの循環というとらえ方をしていると清瀬らしく、今回の審議が出てくる教育計画になるのではないか。

(委員長)

2ページのカラーの図をどのような図柄を描くかということに強く関係してくると思う。これを循環型にしていくか。ただ循環型にしていくと書くのが難しくなるのが、教育の主体が学校だったり社会教育であったりするるので必ずしも循環で表しにくいところがあったりする。大変いいご指摘をいただいた。

やや学校教育にウエイトがかかり過ぎている。6分の4が学校に向かっていくという状況で、生涯学習を標語にするには学校のウエイトが強すぎる。これは議論の中で出てきた言葉なので、排除するというよりはむしろうまくつなぎ合わせて形を作り替えていきたい。もう一つはそれぞれの語尾が表現するものが違っている。

例えば学校づくりという動きを示すものと、郷土愛という目に見えないものを示す表現。柱といったときに、何を言葉として表現していったらいいのか。そこが課題。

(委員)

6本の柱の中の2件だが、上から2つ目のグローバルマインド。これは次の3番目の郷土愛と相反すると思う。グローバルマインドの説明が次の郷土愛の方と傾注していて、グローバルマインドは一般的には外国の事を知る、世界を知るという認識に捉われるが、そのような表現がなかった。内側から見たグローバルマインドであって、グローバルマインドの観点から見た思考ではない。2つ目は4番目の学力を保證するということが、保證できるのか？この保證という言葉は変えてほしい。

(委員長)

指摘があった、グローバルマインドという言葉を残すかということも議論が必要。見る人が何をイメージするかといった時に、見る人が多様にとらえる言葉というのは用いない方がベターだと思う。この委員会の中でもこの言葉のとらえ方がずれているという事が分かったので、この言葉を最終的に残すかという事を検討する必要があるように思う。

(委員)

そういったこともすごく大事だが、これを見るとすごく温かみ等が無い。そして、いろいろな物を大切にしている感が無い。すごく漠然とした意見になってしまうが、冷たい感じがする。

(委員長)

学校教育にウエイトがかかり過ぎているかなという印象がある。どこかをまとめるとかそういうことができるか？

(委員)

まとめるといよりは、全部関連してくると思うが、もう少し生涯学習が前面に出てくるような柱たてが必要なのではないか。このままでは学校学校になってしまう。

(委員長)

一番気になったのは、規範意識と基本的生活習慣の育成で、これは良しとしても家庭教育と学校教育の連携による推進というところ、学校教育を成立するために家庭教育がある面もあるが、そうでもない。そうすると4番は例えば、教育委員会が一番手を出しにくいところではあるが、自立心や基本的生活習慣を育む家庭教育支援とか、清瀬市の教育委員会は生涯学習の成立に向けて

家庭教育を支援する、というような書き方が方がいいかと思う。家庭教育そのものは推進できないので、家庭教育を支援するという立場をとるのも一つの書き方かと思う。

(委員)

まとめるという事では、2番と3番のグローバルと郷土愛を一つにする。グローバルという考え方は、自分の国の事も考えるということもある。内訳でうまく表現すればできるのでは？

(委員長)

例えば言葉で表現すると、今のままだと自然と文化が育む郷土愛は見えにくいところではある。このグローバルという感覚をこの中に織り込んでいくと、どんな表現ができるか、アイデアがあるか？

(委員)

難しいが、郷土愛を育みながら世界を見るとか。

(委員)

グローバルマインドは人によって取り方が違う。基本的にはグローバルマインドについて、自分から発信できなかつたら相手は受けてくれないので、そういう意味では郷土愛とかあるいは日本の事をきちんと理解していないと成立しない。一つの言葉にまとめるとなると、長くなるので、例えば順番を変えるとか、郷土愛の認識をきちんとして、それを踏まえてグローバルマインドを養うとかあるいは多様な価値観を身に着けるとかといった言い方になるのかもしれないが、そのように方向を残しておいて順番を変えてみるのはどうか。ある程度のシナリオみたいなものは考え方を説明しないとその二つを両立させること、一つの言葉で説明することは難しい。

(委員長)

あとは施策の方向性の中に今のようなことを書き込んでいく。

(委員)

施策の説明は3つで成立させる必要はないのか。

(委員長)

例えばこの施策の柱が6本ではなく5本になったという事であれば、合わさったところに関しては増えるというのが必然のような気がするのでいいと思う。

今のところの議論を深めると、例えば郷土の自然や文化に学び生かす教育の推進とかというような表現は可能か。このような書き方であれば、方向性が見えてきて、中に入れ込めるものも広がってくるのではないか。この2番と3番については内容的に近いところがあるということで整理することができる。ただ今の2番には学校というキーワードが入っているので、おそらくこの2番の中の学校というエッセンスを4番目の学力のところとうまくマッチングさせた、学力だけでない、確かな学力と豊かな心を育む学校教育とか、そのようにしていかないと4番は成立していかないかと思う。いかがか。

(委員)

ずっと気になっていたのは、2ページの色で印刷してあるところですが、学び伝える生涯学習だけ真ん中(子どもが育つ・市民が育つ・まちも育つ 清瀬の教育)を黄色がオーバーしている。これは何か意味があるのか？

(事務局)

意図的にそうしたものではないので、意味はない。

(委員)

1ページ目の下の方のマスタープランの体系の全体の説明が分かりづらく、体系は2層構造としというのは左の二つの基本構想と実行計画になると思うが、これについては、一層、二層と書くとうわかりやすいのではないか。また、4つのフェーズに分けたと言って①から④までであるが、次の四角の中にも①から⑤まであり、わかりづらい。①とかの表記ではなく、フェーズ1、フェーズ2といった表記にした方が分かりやすい。また、フェーズ3のところだけ補足が無い。何故か？

(委員長)

フェーズという言葉も分かりやすいかわかりにくいところもある。順序性を包み込むような表現でフェーズというのを使っているのかと思う。

(委員)

基本理念として、『子どもが育つ 市民が育つ まちも育つ 清瀬の教育』がある。その中で清瀬としては生涯全部が教育なんだということを伝えていきたいと考えているが、そうなった時に、順番として、人間としての生涯全部が教育なんだという考え方の中で、郷土の自然等というところはつまり国際社会の中の日本であり、東京であり、清瀬なんだという考えのもとで、じゃあ一個人としてどうしていくか、幼少のころから規範意識生活習慣を確立する、そして幼稚園・学校となって学校教育がある。その学校教育を支えていくのは社会であり親なんだという順番を作っていくといいのではないか。自分の中では大きなところから具体的なところになり、具体的なところをやっていけばまた社会に戻っていくんだというような書き方をしていくと、最終的には巡り巡っていく、清瀬はそういうところなんだという事を打ち出したい。

現行のところにキャッチコピーが二つある。今回は一つだが、生涯教育の理念というのはこういうことだという補足をつけてさらに1から6というように使っていく。一般市民から見たら、結局何が言いたいのか分からない。もっと誰でもわかるようにしてほしい。

(委員長)

重要な指摘。一つはこの並び方が生涯にわたって学ぶという順序性も視野に入れるとどうかという事。もう一つは、ここにもってくる言葉そのものをもっと平易にして表現を工夫できたらという事。

(委員)

基本理念は市が作った理念。それに基づいてマスタープランを作成している。教育をする上での理念とはどれを求めるのか。この基本理念と施策の間に清瀬の教育理念みたいなものが入っていいと思う。それが生涯学習の教育の循環、そこは清瀬の教育理念として変わらないというものがあっていいのではないか。それもあって施策がある。施策は変わっていいが、清瀬としての教育理念というものは生涯学習を通じて学びの循環というものを求めているんだというのが基本理念と施策の間にあれば良いのではないか。

(事務局)

教育委員会の教育目標はあるが、『子どもが育つ 市民が育つ まちも育つ 清瀬の教育』は、市の理念ではなく清瀬市教育委員会としての教育の理念になる。2ページに教育委員会で決定した基本理念について、こういう思いがこの言葉に込められているという事が示してある。ここの意味合いについて、議論していただくことも必要であれば行っていただきたいが、これはあくまで市というよりは、教育の理念ということなので、(教育の理念は)この言葉に込められている。

(委員長)

そのことがこの中のどこかに見えるといいという事だと思う。文章であっても、そんな工夫があると基本理念の言葉だけだと見えない部分があって、それが言葉としてあるといいという事ではないか。

(委員)

1番と5番の具体的な施策を読むと似ているところがある。わかりやすく言えば、②は生涯学習と書いてある。⑭も生涯学習とある。具体的な取り組みは違うが生涯学習という事を1番も5番も言っているという事はどこかまとめられるという事ではないか。

(委員長)

家庭教育というのを教育委員会の施策として前面に出していくという事を今まではやってこなかった。簡単に言うと施策が作れない。今回ここに家庭教育と入れてきたという事は、大きな生涯学習の枠組みの中に家庭教育というものが第一次的責任を負う大変重要なものなんだという認識でいいと思う。そのような理由からここは残しておきたい。

今のような1つ目と5つ目の施策の方向性をうまく峻別していくということが必要になっていくと思う。おそらく家庭教育については、あくまで家庭教育支援になる。

(委員)

先ほどわかりやすい文章でという意見があった。5番はかつ書きされている部分が表に出てきた方がいい。今の表現は堅苦しい。

(委員長)

これは家庭教育で何をやってほしいかを表に出している。教育基本法などだと自立心だとか規範意識だとか生活習慣というのが家庭教育の重要なキーワードになっている。そういったところも意識して作られているのではないか。この辺もうまく柔らかい言葉になればいいなというご指摘。

(委員)

学びの循環型社会の構築という言葉理念と施策の間に入れてしまう標記の仕方もある。6本の柱というのは、基本理念を支える柱という事なので、一つは地域の教育力、一つは家庭教育の支援、もう一つは学力や学校、自然とか伝統文化、あとは国際社会というものを意識しなければいけないと思う。柱を単純な言葉で明確にした方がよい。

柱立てとしては、生涯学習は別として5本の柱を整理すると、グローバルマインドという言葉そのものは問題あるかと思うが、国際理解とか国際社会への関心とか、学校づくりというのは外した方がよいと思う。3つ目の自然と文化は言葉はどうかと思うが、伝統文化の継承とかというのはやはり残さなければいけないと思う。

学力を保障するという事ではなくて、学校はやはり知徳体、体も鍛えるし心も育てる。学校というのはここで前面に出していった方がいい。規範意識というところは家庭教育の支援というところがやはり支えになってくる。この辺りを明確にして柱立てしていった方がもっとわかりやすくなると思う。

(委員長)

今回議論した中で、一つには『学び伝える生涯学習』の位置づけを清瀬の一つの大きな枠組みとして捉え、位置づけていく必要があるだろう。

大きな2つ目に『グローバルマインドを育む学校づくり』という言葉だった。内容的にはむしろ3つ目の『清瀬が持っている自然と文化』を生かしたり育んだり活用したりしていく、こういった側面に落

とし込んでいく部分と、もう一つは国際性の育成といったことは4つ目の『学校教育』の中に入れていったらどうか。学校教育も学力を保証するというだけでなくもう少し全人的な捉え方をすることができないか。教育委員会としては学力というのは非常にウェイトが高い。それを上手く調整したい。4つ目の『規範意識』については、家庭教育をベースに考えたい。学校教育を支える家庭教育ではなくてそもそも生涯学習の基礎となる家庭教育としての支援体制を変えていきたい。

最後の『地域』のことについては、具体的な施策を支えていくつながりの役目をどうつくっていくか。それがまさに地域というキーワードであるが、地域の中に生涯にわたって学ぶ仕組みをどのようにつないでいく役割を作っていくか。以上のような議論を行ってきたと思うが何か意見はあるか。

施策の6本の柱というのは5本の柱にまとまってきた。それを上手く平易な言葉でまとめてもらう。

どこにやることの証拠があるのかと言われた時に実はこの施策の方向性の中にキーワードがあって、これが根っこになっているというものが教育委員会的には必要。、この文章にはこんなキーワードが必要なんじゃないかとか、そのようなご指摘をいただきたい。

(委員)

いじめ、ハンディキャップの問題等のマイノリティの問題等の対応が施策の方向性に見えない。しいて言うなら④多様性～のところに見える。

(委員)

⑩の個別の支援体制の確立について。

算数や数学は少人数で分けていただいているが、現実受験のためには英語が一番重要。しかし、英語の習熟度別の授業がないので入れて欲しい。

熊本の小学校では熊本独特の薄い冊子「学力スタンダード」があり、基礎基本の物。清瀬では三年生で郷土の勉強をしているが、低学年のところで、普段使用しているドリル以外に同じようなものがあればよいと思う。

外国からきている子どもが増えているが、現実問題日本語が話せない。サポート体制が必要。

何らかの問題を抱えている子どもが普通教室に入っている現実があるが、本来なら手厚い教育が必要。

(委員長)

英語の問題、個別化、少人数化の問題については、実行計画の段階で出てくる問題となってくる。特別な教育のニーズを求めている人へのケアは必要。

(委員)

①多様化～について。

市民活動センターやボランティアセンターなどの役割と繋がりを整理しないと、市民はすごくわかりにくく活用できていないので考えていただきたい。

(委員)

⑤の醸成という言葉に違和感を感じる。なぜ育成じゃだめなのか。

(委員長)

醸成は緩やかに溜まっていく状況。育成という積極的な働きかけじゃなくて、やがて積みあがっていくだろうという意味を込めている。

(委員)

貧困家庭への対応を組み込めるか。

(委員長)

市の施策との全体のバランスによる。

(委員)

低学年(1年生)の時にしっかり教えることが重要ということで、取り組むの中に入れていただきたい。

(委員長)

4つ目の柱の学力を保証する学校のキーワードだけでは押さえきれないきれないので、ここを変えていく必要がある。教育委員会としては学力は重要なキーワードだが、それだけでなく、別の表現を加えていきたい。

(委員)

知・徳・体の徳を理解できるような表現をしていただきたい。

(委員長)

家庭教育、学校教育に入ってくるだろう。

(委員)

3ページの方向性2に図書館のサロン化という表現があるが、本当にこういう表現でよいか。サロン化というよりは、従来の情報発信基地というような表現の方がよいかも。個人的にはサロン化は賛成だが計画に載せる表現としてはどうか。

(委員)

中央図書館の幼児コーナーを別のスペースに作ってほしい。

(委員)

5ページの方向性6、地域の教育資源の範囲はどこまでを考えているのか。

(委員長)

明確な範囲はないが、地域すべてと考える。(地域資源、人材)

(委員)

取組例として出すなら、文言によって具体的、抽象的表現を整理した方がよい。方向性7の取組例、郷土文化各種団体による出前授業による推進、清瀬の郷土資料の活用の徹底のように具体的な表現もあれば、方向性1の高齢者のいきがいくりのように抽象的なものもある。

(委員長)

事務局に検討願いたい。

(委員)

グローバルマインドの言葉に引っ張られてしまっている感じがするので、言葉自体はなくした方がよい。

(委員長)

学校教育もアクティブラーニングに振り回されているので、言葉の出し方には注意した方がよい。

(委員)

⑱の地域の力を～について。学校支援地域本部はあえて出さないのか、実行計画に出すのか。

(事務局)

実行計画に当然出てくるだろうということで、あえて出していない。ただ、出した方がいいという意見があれば出す。

(委員)

⑬学びの場の提供⇒学びや交流の場の方がよいのでは。

(委員長)

いい意見だと思う。

(委員)

⑰防災・防犯体制～について。教育の計画としては、範囲が広いと思う。安全・安心という言葉も本来別物なので、言葉を使い分けた方がよい。

(委員長)

登下校、放課後の見守りを鮮明化した方がよい。

(委員)

生涯学習を一番に位置付けるなら、「ゆりかごから墓場まで」のような表現ができると良い。

(委員長)

ここは柔らかい表現で一番工夫したい。

⑫に「教育環境」という言葉を入れた方が良いと思う。建物の問題や、やがて義務教育学校というスタンスが拡大してきた時に、教育環境は変化していくと思う。やがて、地域コミュニティと一体化した建物を想定してもよいのでは。

(委員)

施策の方向性を3つにそろえる必要性はあるのか。

(委員長)

柱を6つから5つに変える方向もでているので、その必要はない。数にこだわらずにわかりやすい方向性になればよい。

(委員)

④多様性～について。表現が固すぎるので、柔らかくできないか。

(委員長)

認め合いとかの方がよいか。多様性＝違いを認め合う

(委員)

わかりやすい表現で工夫して欲しい。

(事務局)

作業部会と事務局で今日の意見をまとめる。委員長に了承を得ればパブリックコメントで市民の方の意見を踏まえまた7月の会議で検討を深める。

3 事務連絡

(1)今後の予定について

4 閉会